西洋易知録

四

9/9
388
4

東京市立日比谷図書館蔵書
特別
門
368
巻 4

西洋易知錄卷之三

河津孫四郎　譯述

第三世紀

第一篇　查理曼（シャルレマン）帝の事

（要）紀元八百年教公レオ第三羅馬（ローマ）城ニ於テ查理曼ヲ西帝トスル

是ヨリ先キ説シ如ク西歐羅巴（ヨウロッパ）ハ羅馬帝國瓦解ノ後諸國ニ分裂シ居リシガ再ヒ又一統シテ一大强國トスル時至リ之ヲ統一シテ四十三年ノ間掌握シ多ク英雄ヲ即チ查理曼ナリ

査理曼(シャルレマン)の紀元七百四十二年に生まれり父は佛國(フランス)王北比諾(ピピン)にして母をベルタといへり父北比諾の王位に登らしむる査理曼いまだ幼稚なりしかども北比諾王薨ずるとき兄カルロマンと共に佛國(フランス)を分ち與へられさうカルロマンはニューストリア。ボルゴンヂーの二國を領し即ち佛國の北地中國(ベルギー)の査理曼(シャルレマン)はオーストラシア。チュリンヂアの及ひ其他日耳曼の屬國を領しり

査理曼(シャルレマン)の位に即くや直ちにアコイテーンを征伐し速に之を平定しり此ときに兄のカルロマンは薨しまりしかるにカルロマン附屬の重臣等相議してカルロマンの諸子を立てんと即ち査理曼に上書してカルロマンの國をも合せ領し給いんことを願ひまりし頃は紀元七百七十一年にして査理曼二十九歳の時なりき

史家査理曼(シャルレマン)在位の時間を二段に分つ第一段は七百七十一年より八百零四年撒克遜(サクソンス)人降服の時に至り第二段は同年より組落の時までとなり但し第二段は即ち査理曼の戦争を止め侵地を治る時をいふなり

査理曼の為せし戦争の敵は里尼河(ライン)の外に住ひまる撒克遜(サクソンス)人伊太利(イタリヤ)の倫巴爾(ロンバル)人是班牙(スペニヤ)なる回教の徒匈牙利(ハンガリー)に住ひまるアバルス人ありまた査理曼又嗹(デン)人及びスクラボニアン種族の民と合戦せしことなりき

査理曼(シャルレマン)國政を行ふに日耳曼(ゼルマン)の古法は國民の深く愛せ

る所あれば之を取行ひ羅馬教公の宗旨の歸する所あれば之を助くて諸民の心を懐ける是を査理曼の國を治る二大眼目なりゝ

撒克遜人の衆神教を奉しゝるが査理曼の之を降して西教を弘めんと欲し紀元七百七十二年オルムスの會議に於て國兵を擧げ撒克遜人の國に發向し直にイレスビュルグ城を降し「イルミンシュル」といへる撒克遜第一の大佛を毀てり抑此像は甲冑を着る兵士の木像にて平常は廣き宮社の中に大理石の圓柱を立て其上に之を安置し戦爭のときは僧侶之を戦場に引出し戦爭終るとき所有俘虜及ひ怯懦の者を殺して此神を祭

りゝることと撒克遜人の習はしなりきさて査理曼は之を粉の如く打碎きて大理石の圓柱は之を地に埋めけり撒克遜人は之を見て大に恐れ直に和睦を乞ひ十二人の人質を獻しけり

撒克遜人は大事なるときは國王を立て其事終るときは國王も他の頭人と同列となり然る處こゝにウィッチカインドといへる一人の豪傑起りしが才智を以て數年の間國王の如き威權を奮ひけり此人は勇氣ありて數多の國民を説き勸めて數査理曼に反らしめ一程に査理曼も全く之を平定するまでに數此地に發向しけり査理曼は撒克遜の要城イレスビュルグ。レギスビュルグ

の二城を取りて之を其本営とふし數撒克遜の兵を打破りしが和睦して兵を引き擧げ歸國しる頃ゐい撒克遜人又謀反を企て舊め如く衆神教を奉し西教門の僧徒を殺しる是の如きこと數年遂ゐ紀元七百七十九年ゐ到りし愛査理曼いもるや寛るある所置ゐも倦き果てしるば一擧ゐ此地ゐ押し寄せ直ゐ之を打滅して群縣とふし僧官ゐ命して西教を説るしめ新ゐ律令を作りて此國を治めるり律令の厳酷ありしことい如何様の罪を侵せるとも大抵死罪を免るゝこと能はざりしとぞ

紀元七百七十七年ゐ於て撒克遜王ウィッチカインドを

嗹王の方ゐ出奔しるりしが撒克遜の平定せし後又其國ゐ歸りシンタルといふ人愛りて佛郎西の一軍を打破りるり査理曼此事を聞くと等しく怒り忽ち頭上より起り直ゐ兵を擧て撒克遜の國ゐ趣きウィッカンドゐ與をして戦ひし者凡て四千五百人を鑿ゐしるれがウィッチカンドを又嗹王の許ゐ出奔しるり其翌年即ち紀元七百八十三年ありシッチカンド又撒克遜の國ゐ歸り謀反を企てしるり査理曼の為めゐ二度大敗を取りしるばウィッチカントを遂ゐ戦争を為をるも勝ちがるることを察し此後を謀反を企つることもふるり然しその後も撒克遜人い謀反を起をこと屢ふりしが遂ゐ査理曼ゐ打勝つ

こと能はざる紀元八百零四年に於て全く降服しぬるに
ゐば查理曼は其國の民凡一萬人を徙してフランドル
ブラバント及ひ佛國の諸郡に散布しぬる
查理曼の后は伊太利倫巴爾人の王デシデリュースの女
ありしが後查理曼之を離縁してヒルデガルドと云へ
る婦人を后とせしかばデシデリュースと自然不和を釀
しぬるに羅馬教公と倫巴爾人と軍の時に至り教
公アドリアン第一より查理曼に援兵を乞ひぬるに查理曼之
を容易に承け引き直に兵を率ひて牙白山を越へ二隊
に分ちて伊太利に攻め入りぬるに敵兵更に之を支ゐ
者ふく倫巴爾王はパヒア城に籠りぬる查理曼の兵へ

ロナ城を取りぬる愛城中に兄カルロマンの寡婦及ひ
其諸子居住せり此人々は查理曼の誅を恐れてデシデ
リュースの許へ逃れ来りしかり此人々は此後如何あり
果てしや今之を傳へざれども倫巴爾の諸城は風を望
んで降參しぬれども唯パヒア城のみは堅く守て下ら
ざりしかば查理曼は暫く兵を已めて羅馬城に趣き此
地より歸りて再ひパヒアに攻め懸りその粮道を絶て
嚴しく之を圍みしかば城中飢饉に得多へざ遂に開城
してデシデリュースを查理曼に附與しぬる查理曼則ち
デシデリュースを一寺に幽し自ら倫巴爾治王と稱し其
國傳来の鉄冠を冠りぬる時に紀元七百七十四年に

り

その前つゝ是班牙(イスパニヤ)を移住し多く田こ教の徒「アバレード」朝の田王即ち亞剌伯王を背きて一箇の國を起し多り是をコルドハの田國といへ然るども此國未だ穩かあらず尚心服せざる者ぞ多うりゝまれば或る不平の徒査理曼(レヤルレマン)と是班牙(スパニヤ)を迎へ此地の新政府を覆さんと謀りけるを査理曼いその迎へを應じ祖父の如く耶蘇教門を護りし功を顯はさんと欲し即ちその兵を引率して是班牙を發向しゝり時を紀元七百七十八年あり是時査理曼(シヤルレマン)伊太利(イタリヤ)の後を取用ひ多の軍法を倣ひ兵を諸所を分ちて諸道より一齊をサラゴサ城を攻め寄せ偖其兵

此城を攻め落しゝれいナハルレアラゴンの地盡く風を望んて査理曼(シヤルレマン)を降服しゝり是を於て比列尼斯山(ピレネーズ)の南を佛郎西(フランス)の屬國起りゝり是を名ゝて是班牙(スパニヤ)マルチといひゝりゝ査理曼い凱陣して佛郎西を歸りけるもれども後陣をいまゝ佛郎西を入らゞロンセバルレスの山路を懸りゝるときバスクス人(バスコンの為を嚴い是散くを打破られ、ゝり此とき討死しゝり者の中を不利太尼侯(ブリタニー)ローランドゝて査理曼の甥にゝり古人の詩又を小説を此人の武名を唱へしゝの多バハリア公タッシロを倫巴爾治(ロンバルヂー)王デシデリュトスの女壻ゝり倫巴爾治の査理曼を滅されしゝ紀タッシロを査理

内閣文庫蔵版

曼ヨリ叛シテ竊ニヨリアバルス人ヲ迎ヘタリ然ルニ其旨
露顯シタリシカバ査理曼ハタッシロヲ捕獲シテ之ヲ寺
ヨリ押シ込メタリ然ルニアバルス人ヲ約束ノ如クバハ
リアヨリ攻メ入リシカバ査理曼ヲ迎ヘ討テ之ヲ破リ北
ヨリ伐追テ匈牙利ヲフラーブ河ヨリ至リタリ此時査理曼
モ散克遜人ノ佛國ヲ侵冠セシ由ヲ聞キシカバ此時ハ散克遜
人平定ノ前ヲリシヨヘフレ太子ペピンヲ命シテアバ
者ヲ者之ヲ疑フコトヲ
ルス人ト戰ハシメ其身ヲ佛國ヨリ歸リタリ
ンハ紀元七百九十六年ヨリ於テリング砦ヲ取リ此砦ハ
ブダ府ノ一砦ヨリシテ多ク金銀ヲ貯ヘタリ
西ヲ此地ヲ取リシヨリ歐羅巴中ノ富國トフリヨリタリ

其戰爭中ヨリ査理曼ハ多腦河ヨリ里尼河ヨリ一大長溝
ヲ掘ンコトヲ企テシガ其事業ヲ果サズ
人ハ紀元七百九十九年ヨリ於テ査理曼ヨリ背キシ又破
ヨシシカバ遂ヨリ滅ミレタリ今ヨリ尚カウカシュス山ヨリ同シ
キ名ノ小部落ヲリシレデ査理曼ノ為ヨリ滅ミレシアバ
ルス人ノ僅カヨリ殘リシノミ
吾ヨリ今査理曼在位中ノ至要紀事ヲ説ンヨリ頃ハ紀元八
百年四月某日羅馬城ヨリ賊黨起リテ教公レオ第三ヲ街
ヨリ於テ傷ケタリレオハ疵痍ヘテヨリバデルボルンヨリ趣
キ査理曼ヨリ見ヘシフ査理曼厚ク之ヲ饗應シ貴人九人
ヨリ命シテ護衛セシメ之ヲ伊太利ヨリ送リ査理曼モ亦伊

太利羅馬城ヨリ趣キ去ル程ヨ十二月廿五日トス
ル是ヲ查理曼即位ト定メシ日ヨリ伊太利佛郎西其餘
查理曼ヨ附屬シタル地ノ貴人高僧金紫ノ麗服ヲ着シ
テ聖波得ノ像ノ前後ヨ會集セリ其中ヨ容貌堂々服燗
ニシテ尊ク君主問ヒタヒト知ルベキ英雄豪傑ノ查理曼
ヲ身ヨ羅馬貴人ノ禮服ヲ着シテ聖波得ノ前ヨ跪キ頭
ヲ地ヨ俯シテ禮拜ヲ行ヒ恭敬シテ天下第一ノ貴
僧教公レオ翹ヲ寄ヲ查理曼ノ頭上ヨ冠ヲ戴セタリ
此時四面ヨリ一齊ヨ賀シテ羅馬人ノ帝查理澳額西土
斯長壽万福万邦歸服ト叫ヒタリタリ是ヨ於テ乎教公レ
オ第三查理曼ヲ西帝トシ以テ中絶セシ西帝國ヲ再

立シタリ此時查理曼云ク我ヒ此ノ如クセラレンコト
ヲ知ラバ羅馬ノ寺院ヨハ趣ヲ寄シヨトヒタレド
モ其宿志ハ蓋シ之ノ位ヲ踐ンコトヲ謀リシヨ
シ
查理曼ハ紀元七百八十一年ヨ於テ早クモ信實ヲ副
王ヲ遣ハシ以テ得ヲ察シ即チ國ヲ分チテ諸子ヨ与
ヘ其子查理ヲ日耳曼ヨ封シ子路易ハアコイテーンヨ
封シ子ペピンヲ伊太利ヨ封シタリ查理曼ハ此ノ如ク
シテ廣キ國境ヲ諸子ヨ守ラシメタレバ晚年ヨハ大抵
軍ヲ為ヲコトヲアラタメタリ三子ノ中查理ペピンノ二子
ハ查理曼ヨ先ダチテ薨シタリ

査理曼（シャルレマン）の身エースラシヤーベルなる宮中に在りといへども其威權の大なりしこと東帝を更なり亞剌伯（アラビヤ）の回王に至るまで皆査理曼と交りを結ぶ程なりし然し査理曼は西歐羅巴（ヨウロツパ）の事に多く心を用ひ且つ入査理曼の憂へしもの一箇なり但し自ら恐れしは非ず子孫の為に憂へしなり是也何者ぞとなれば其頃ノルマン人といへる夷英吉利（イギリス）及び佛郎西（フランス）の海岸を侵らしなることなきぐにして査理曼は其必ず佛國（フランス）を脳まん為なることを察し大に之を憂へしとぞ

紀元八百十四年査理曼殂落し其前年査理曼を貴人を集會して太子路易（ロイス）に帝冠を与へあり

此人は性質勉勵にして一分時なりとも無益に費さことなく衣服を着さるときに當りては諸士官の勤怠を問ひ糾し晝夜又は夕飯の時に當りては近臣に教典史記を讀ましめ之を此の如くして査理曼は多端の職務を取行ひ且つ身體の運動をも文學をも之を學ぶを得あり

路易（ロイス）ルデボン子ールを父に繼て帝となりしといへども其人と為り教門に迷て政事を取行ふの器量なく在位二十六年の間徒に國風を和げんことを謀りしのみにて國中更に治まらず其殂落するに至りて三子國を爭ひ嫡子ロテールを帝號を稱しれども査理路易（ロイス）の

二弟兵を合せて之をホンテ子ールの野に打破りぬ時に紀元八百四十一年なり後二年即ち紀元八百四十三年に至り三子ヘルドンに於て和睦を為し查理(レヤルレス)ハ佛郎西(フランス)王とふり路易(ルイ)日耳曼(ゼルマニー)王とふりロテールを伊太利(イタリヤ)其餘路尼(ローン)里尼(ライン)二河の邊りなる小地方を領しぬる是に於て乎佛郎西(フランス)日耳曼始めて二國に分る查理曼(レヤルレマン)血統の佛王を「カルロウィンヂアン」朝と名つけしが當朝も亦前朝の如く暗主暴君のみにて說くに足りぬる譚もなし此の如き君政を行ひぬれば佛國大に亂れ遂に紀元九百八十七年に至りヒューカペットといふ者佛王の位を簒しぬる史家此時までを古昔佛郎哥(フランクス)人の史とふし此より後を當今佛郎西(フランス)人の史とふ

「カルロウィンヂアン」朝佛郎哥(フランクス)王即位の表

王の名	紀元
ペピンルブレフ	七百五十二年
查理曼(レヤルレマン)及びカルロマン	七百六十八年
查理曼獨り王とふる	七百七十一年
路易(ルイ)第一(デボン子)ルと称す(ロリヤス)	八百十四年
查理(レヤルレス)ゼバルド	八百四十年
路易第二(ゼスタンメ)ルと称す	八百七十七年
路易第三及びカルロマン第二	八百七十九年

カルロマン獨り王多り	八百八十二年
査理（レマルレス）ゼベット（ゼベット）と称ス	八百八十四年
巴勒（パリヤ）侯イウデス（ヒュー）又とりふ	八百八十七年
査理第三（ゼレンプ）ルと称ス	八百九十三年
ロベルト（イウデ）スの弟	九百二十二年
ボルゴンヂーの（ロドルフ）	九百二十三年
路易（ロイス）第四（ドイトメ）ルと称ス	九百三十六年
ロテール	九百五十四年
路易第五（ゼラヂー）と称ス	九百八十六年

第二篇　回々教の徒威を東西に奮ふ事

要　ハロローンアルラシット王美政を行ふ

査理曼の時に當りて回々教を印度（インヂヤ）河より大西洋まで弘まり其國四に分れり是班牙（スペイン）はコルドハ回國なり亞細亞（アヂヤ）埃及（エヂプト）と「アバシード」朝回王の國とふし亞弗利加（アフリカ）の北地はメキレスカイロローアンの二國なり紀元七百十年回將モザの屬將タリッキ五百人の兵を以てギブラルタル海峽を渡りて是班牙海岸に上陸し其翌年即ち紀元七百十一年に於てタリッキ一万二千人の兵を率ひて維西（ウイヒゴット）的人とセレスに戦ひ大に之を破り一ぢゃ維西的王ロデリック逃んと欲し誤てガダル

キウィル河ヨ陷リ溺死シ終リ回将モザハ屬将の勝ヨ乘テ盡ク維西俄的人トアスチュリアスの山地ヨ追ヒ拂ヒ遂ヨ是班牙ト平らげ終リ

ガダルキウィル河の邊リ有る一都城コルドハヲ程なく是班牙回國の都會と為リ回く教の徒是班牙の境外ヨ出て査理馬突耳の為ヨ追拂られしことハ既ヨ第二巻ヨ入へり後北北諾査理曼二王の為ヨ又も追拂ハれ程ヨ回く教の徒ハ是班牙の北地ヨ居ることと得ざりしとハいへども此國の中國南地ヨ於てハ其威を奮ひ寺院学校を建て大ヨ道路を切り開き終リ然リ愛亞剌伯「オンミヤット」朝滅びしハば此朝の一族アブデルラマンと云へ者難を避クて是班牙ヨ到り此地の回民を説きて亞剌伯の新朝ヨ背かしめ遂ヨ獨立の一回國を起し終リ是ヨそ即ちコルドハ回國の權輿なり時ヨ紀元七百五十五年ヨして此時より歐羅巴回國史記の面白き條と為リ

「オンミヤット」朝の滅び終リや「アバシード」族王位を簒し終リ此族ハ馬府美德の叔父アバスの後胤ヨして此朝を紀元七百五十年より千二百五十八年まで凡そ五百餘年の間滅びざり此朝の諸王の中ニて最名高きをハローンアルラシット「又アーロンヨゼヲスト」なり此君を紀元七百八十六年位ヨ即き八百零八年まで在位しなり「アラ

ビアンナイッ」といふ面白き小冊あり數其名を載せあり此朝の時回國より於てチグスリ河の西岸より都を建てあり之をバグダット城といふ「アバシード」朝諸王之より都し數百年の間ふるふ其威權を奮ひ

ハローンそいまゞ位に登らざりしとき大將として

ボスホリュス東帝の國をへあり攻めるるに女帝イレーンを恐れて和睦を乞ひ七万粒金の租税を獻せんことを約しられバハローンを稍之を承諾して歸陣しる時

に紀元七百八十一年あり

後も亦此租税を取立るが為に八度ボスホリュスを攻め

去る程にボスホリュスといふ者女帝

イレーンを廢して自ら帝と稱し即ちハローンに書を

贈りしに將棋の言葉を用ひる其文に云く女王（イレーン駒の名女帝は譬へて用ひしあり）を足下（ボ駒の名、我飛車の如き）と思ひ已に

い歩（駒の名歩の如し）と思ひしが故に足下に屈して租税を与へありしあれが今宜くこを我に返納せよ然らざれば

兵端を開くべしと帝の使節此書簡と共に一束の剣を

回王の足下に置きるれバハローンを微笑して佩るる

名剣を拔き唯一刀に數本の剣を切り碎き顧みて書記

官に向ひ答書を作らしむ其文に云く聖教門の高師ハ

ローンアルラシッド羅馬の犬ニシホリュスに告ぐ我是邪

教門の母なる生徒多く汝の書簡を讀めり汝今我答を聽くこと能はざるに追付我答を見ることかなへし此書を与へ

ぜ自ら行て征伐せと

ゞと云へる意なり

偖もハローンを答書のごとくボスホリュスを發行し小亞細亞（アジア）を亂妨ーゝゝ其時東帝ハ租稅の金をハローンに及ひ其諸子の頭を印せんことを約し稍く和睦を得るり

ハローンを西帝查理曼（シャルレマン）と厚く交り且つ又バグダット城を多く詩人學生を招き集めて查理曼と相競ひしかハローンの時より亞刺伯（アラビヤ）文學盛んに行られゝりハローン嘗てバルメレデスと云へる黨を鏖（みなごろし）にしより其中に頗る忠義ある宰相二人ありゝられぞハローン一生の過ちなるハローンを紀元八百零八年に反賊コラサンのサタラップを征伐しゝる時に當て薨しゝり此時より紀元第十紀の中頃回王ラヂ又アリメツトの第四の世に至りーに此君紀元九百四十年に於て盡く政權を「イミラルオムラ」官マホメットベンライクに委任しゝるより回國の形勢一變し此時より人皆此官位に登ることを爭ふに至り紀元九百四十五年より千零五十六年まで凡て一百餘年の間ボイデス氏族此官職を世々に傳し威權を奮ひゝり

然る處に北狄セルジュクトルクス人の酋長トグルル

べー其種族を率ひて此國に到り自ら「イミラルオムラ」と稱し直に全國を打靡(なびけ)あり然りといへども未だ「アバシード」朝の回王を廢せざりし此の如き形勢にて紀元千二百五十八年に至り始て此歳モンゴルタルタル人此國に到りバグダット城を攻め取り回王アブダラを殺しくり是に於て「アバシード」朝滅びあり

第三篇

日耳曼(ゼルマン)帝國興る事

要　オトゼグレート帝紀元九百三十六年より九百七十三年まで此國を支配せ

紀元八百四十三年ヘルドンの和睦より日耳曼國佛郎(フランス)西國と分ち里尼(ライン)河を境とし くり其後凡て六十八年の間査理曼(シャルレマン)帝の一族日耳曼國を支配し紀元九百十一年に至まり

此時査理曼一族の朝滅ひ日耳曼(ゼルマン)國人フランコニア公コンラットを撰て其國王となしくり然し佛郎西に「カルロウィンヂアン」朝査理曼一族の朝(カルロウィンヂアンレス)の滅ひしは是より遙くに後の事あり抑日耳曼佛郎西(ゼルマンフランス)兩國の民もとは同しく佛郎哥(フランク)人にして西に住しは佛郎西人とあり東に住しは日耳曼人とありしあれども日耳曼の民は尚一致せざ

サクソン　チュリンヂアン　フランコニアン　シュアビアン　バ

ハリアンの五部を分ち此諸部の君侯は皆日耳曼王を選ぶの權あり故を此時代より第十九紀の始めまで（此時）日耳曼帝の号滅び澳土利帝となる日耳曼帝は父子相傳ふこと能はざりき

紀元九百十八年顯理（ヘンリー）ゼホウレルコンラットを繼て王となる是を是サクソン族日耳曼王の祖なり顯理（ヘンリー）の位を即くや盡く日耳曼の諸種族を打從へ以て王の權威を大にせんと欲し直にアレマニアバハリア両國公を打從へ又ロルレーン（ロガリー）の地を取りなり偖また此君在位の時を當り匈牙利國人頻りに日耳曼（ゼルマン）の境を侵しなれば顯理は國境に數多の城砦を築きて之を防ぎ

城砦のうち製造貿易の盛んなる都府となりしもの多し然りとなれども顯理は匈牙利（ハンガリー）人を防ぐが為に騎兵を數多作りなり故に或る人の説に云く騎士の義侠を尚ぶ風俗は此顯理の始めしなりと余思ふに然らざるも風俗の興るは豈一人一朝のことならんや是れ蓋し日耳曼（ゼルマン）國人舊来の性質の盛んなりしなるべし但し顯理（ヘンリー）は騎士の巧みなるものへ莫大の賜ありしを以て此君の時より其風俗の別して盛んなりしは必定なり

紀元九百三十六年顯理（ヘンリー）薨し太子オトー（アドルフ）エーラシャーペルに於て位を即くコローンマエンス二呼の教魁侍坐し

くりオトの位に登りゼルマンや日耳曼の大諸侯大半謀叛しるくくれども皆オトの智勇に勝つこと能はざるを察し容易く降服しまりオト即ち「コントオフゼパレース」「マルグレーフ」の二官を置きて之を諸侯の國に遣し置き其謀反をるに備へくくり

オトハ教門を愛するを以て心を伊太利に傾くくに其上五十餘年の間日耳曼の王に西帝の號を稱しまりえのみくうしーグオトを此尊位を踐んことを欲しくれば殊に伊太利の事務に關ることを悦びぬ此尊號い伊太利の大諸侯皆之を得んと欲するを以て羅馬教公も決しくうをき尤教公の大目とする所ハ教公の為に伊

太利の諸侯を従へ亞剌伯の寇賊を防ぐに足る一勇將を撰んで帝號を授くんと欲してあり

伊太利王ロテール薨しまるが其夫人アデレードを容顔美しくくに世に名高き婦人ありくれバヘレンガルとゆへる者之を夫人とふして其國を押領せんと量り遂にアデレードを捕へしーグアデレードを之に從ひ竊に遣して救ひを乞ひくるアデレードの如き美しき婦人を救ひを乞ひくるアデレードを只管悦びに堪えず即日兵を擧て伊太利に進發し直にロンバルディーを平定しまり時に紀元九百五十一年なりし是より先きオトの先妻ヨジストを身罷りしと

以てオトをアデレードと夫人とふしその國と并せけり

後四年に於て匈牙利(ハンガリー)人舉國の兵を以てオーグスビュルグ城の近傍に寇しあるオト自らこれを征して大に敵を打破りしかば匈牙利人を辟易して退き其後絶て日耳曼に寇をることあらざりき此時オトを日耳曼と匈牙利との境なる州郡の民に兵を演いしめ匈牙利人の侵寇に備へり実に堅固なる上にも又慎をを加ふといふ為さるるオト又スクラホニアン人とイルブオーデル両河の間に破り遂にウィスチュラ河に至りぐ紀元九百六十一年オト伊太利に進發を米蘭(ミラン)城に於て

倫巴爾(ロンバル)王の位に即き傳来の鐵冠を受け其翌年第二月羅馬(ローマ)城に於て教公(ジョン)第十二オトに西帝の冠を献しぐり昔し査理曼(シャルレマン)西帝の位に即きし時より是に至りて凡て百六十二年なり

去程に教公ジョンを又オトを廢せんと謀りしに謀發覚されしかば餘義なく出奔しぬ僧官等即ちレオ第七を立て教公とぐり其後オトハ教公と共に伊太利の無道なる諸侯を盡く廢し僧官をして各郡を支配せしめぐり是に於て伊太利の形勢一變し久しく亡びたる自主の風亦興りぬ後伊太利に共和政治の盛んとふりしも此變革よりなり

オト後ヨリ又伊太利ヨリ趣き此ヨリ居ること六年ヨリして日耳曼ヨリ帰り程ふく殂落し給ふ時ヨリ紀元九百七十三年あり

此後日耳曼の國歐羅巴諸國の冠あり是蓋しオト等諸代の君の力ふり且つ印刻の天下ヨリ益ける耶蘇正教「プロテスタンチスム」の人民ヨリ利ひける其始めハ此國ヨリけると思ひ并ヨリ吾國帝英國帝ヨリ日耳曼國と親族ふると思へバ日耳曼ヨリオトの如き英賢の君起り西帝の位を得ふること吾等英人ハ更ふり天下の人皆豈榮とせべきにあらんや

オト第二オト第三顯理第二相繼て日耳曼帝とふり嗣絶ふり國人即ち「フランキス」族の祖コンラットを立つ時ヨリ紀元千零二十四年ふり

サクソン　フランキス　両族日耳曼國帝即位の表

帝の名	紀元
コンラット第一	九百十一年
顯理第一	九百十八年
オトゼグレート	九百三十六年
オト第二	九百七十三年
オト第三	九百八十三年

顯理第二	千零零二年
コンラット第二	千零二十四年
顯理第三	千零三十九年
顯理第四	千零五十六年
顯理第五	千百零六年
ロテール第二	千百二十五年
無帝の間	千百三十八年
コンラット第三	千百三十八年
フレデレッキバルバロサ	千百五十二年
顯理第六	千百九十年
ヒリップ	千百九十八年

オト第四	千二百零八年
フレデレッキ第二	千二百十二年
コンラット第四	千二百五十年
維廉（ヰルヘム）第	千二百五十年
無帝の間	自千二百五十六年至千二百七十三年

第四篇　東帝國の事

（要）ジョンヂミスセス帝の世

上に説し如く西に日耳曼（ゼルマン）帝國の盛んなるより東に亞剌伯（アラビヤ）の國の強きにより東帝の國を二大強國の間に挾むりと雖も尚その開化文明なること諸國に冠たり

如地尼安帝（ビヨスチニアン）沮落してより一百六十年の後即ち紀元七百二十五年に於て一大事件起りその濫觴を考るに此項の東帝をレオ第三といひしが帝嘗て思ふに回々教の徒諸國を侵掠して其勢の盛んなるを彼等の強きが故なりとし耶蘇教の惡しきに由てあるべしと思ひしかば像を拜する舊来の惡風を除き耶蘇教門を正しき教門とあらんと量りしに耶蘇教の諸國之を悅ばざるもの多く終に天下の亂とそなりぬる像を拜ちんと欲する者を拜像徒（ヒコノクラスチ）といひ像を廢てんと欲する者を破像徒（ヒコノクラスチ）といへり羅馬教公（グレゴリー）第三像を壞つを非とし像を壞ちまる者い真神を拜することを禁じ人

と交ることを許さざらんと固く之を禁じられども兩徒の爭更に止まず遂に羅馬（ローマ）の寺院と剛士但知腦布爾（コンスタンチノープル）の寺院と相別れて互に爭ひ競ふこと一百二十年に及ひ紀元八百四十二年に於て諸國の高僧剛士但知腦布爾（コンスタンチノープル）に會し遂に拜像の說勝ちぬ此宗旨を今希臘教（ギリシヤ）と云ふ魯西亞（ロシヤ）國に盛んなる宗旨起りしあり此宗旨分れて羅馬教公を益西帝（日耳曼帝）に依賴しれば西帝の勢愈歐羅巴（ヨウロツパ）に奮ひぬり

紀元八百六十七年より千零五十七年まで「マセドニア」朝の君東帝なりしが此間東帝國い盛んなりし此國に亂れ入り多く一夷族耶蘇教に變して遂に東帝に歸

服しまることなりり又都まハ綿糸の製作毛織の貿易盛
んまして西ハ日耳曼北ハ魯西亞の果まを至りて此地
の産物を珍重を然のみならず東方の産物も皆必を此
地の市場を經て歐羅巴まを渡りり
「マセドニアン」朝諸帝のうち最賢ふるをレオ第六自八百八
十六年至九百六十九年の二帝
百十一年　ジョンジミスセス自九百六十九年至九百七十五年の二帝
ありレオ帝ハ理學まを長し軍制論を著をジョン帝ハ在
位六年の間呼くまを武功を顯し國名を擧られまりジョ
ン帝の時魯西亞の將スワトスロース オルガ河より多
脳河までの諸州を打靡まて剛士但知脳布爾城近く攻
め寄せまり帝自ら之を伐て大まを敵兵を打破り北ぐる

を追て多脳まを至り其本營まを打入りしかば敵兵を殘り
少ありまを討ありまりく這く本國へ逃げ去りりり帝都まを歸
り即ち三軍を率ひく都内を行列し勝利を賀しまりり
此時帝を肥馬まを乘り頭まを金の冠を戴き手まを桂の冠を
持しとぞ
東帝國の政を國帝擅權の政まして國帝を奢侈を極む
今我他國の使節の天子まを謁するときの有樣を左まを示
して其奢侈の一例とあるべし
使節の帝宮まを入るや警固の兵をずらふ立派ふる甲冑を
よろひく両側まを列を其人真幾千といふことを知らぐ
旌旗翻飜として天まを閃めき然も其旗を善美の綿を

製しあり斯くして百爾西亞の花壇を敷き其上又を薔
薇と沒藥とを撒きちらし薫風馥郁として恰も仙境又
入りしかと怪しまるるまで使節謁宮の石階又登るや
否や長く垂まて已が脚下又及べる幕をつづくりこう
引きちがるるのかり時又一個の美しき坐席を現出せ
使節驚て前面を視上ぐるに國帝を紫と白との禮服を
着し金の椅子又倚らるるあり其側又在るの后妃又して
言葉婉しく容姿艶麗実又人として毫爽飛越せしめり
とぞ其坐の周りを朝臣列坐し皆白衣を着あり帝坐
の後又を金を以て作る欅欄の木ありて其枝又の人の
作りある美しき小鳥飛び戯る帝坐を守護しある金銀

の両獅を跳りて大聲を發し宮内又聞ゆる喇叭の聲ハ
吹く毎又調子を高くせり夷の使節ハ皆之を視て喫
驚せざるをふく唯默然として平伏しある許りあり日
耳曼の騎士の此國又使せしあるハ流石ガ又地又俯を
ことをあるうしといへども其美又感動せしめて平生
の勇氣を忘る先きの咎へも覚へずとあるとぞ
嗚呼此の如く奢侈を極る國の豈滅亡の時あるんや
即ち耶蘇降生の年より千餘年を過きて後十字戟とい
へる軍起り此國遂又滅亡又至るとそ次の巻又説く
と見るへし

知新館藏板

「マセドニアン」朝の東帝即位の表

帝の名	紀元
バシリュース第一	八百六十七年
レオ第六	八百八十六年
アレキサンドル及剛士但丁（コンスタンチン）第七	九百十一年
ロマニュス	九百十九年
剛士但丁第八	九百二十年
帝五人ありし間	九百二十八年
ロマニュス第二	九百五十九年
ニセホリュス第二	九百六十三年
ジヨンジミスセス	九百六十九年
バシリュース第二及剛士但丁（コンスタンチン）第九	九百七十五年
ロマニュス第三	千零二十八年
ミカール第四	千零三十四年
ミカール第五	千零四十一年
剛士但丁第十及ゾヨ	千零四十二年
テオドラ	千零五十四年
ミカール第六	自千零五十六年至千零五十七年

第五篇　ノルスメン人の事

要　紀元九百十一年ロルロ等佛（フランス）の

ルマンヂに居留を
初め查理曼帝一日地中海を望みノルスメン人の船を
遠見して涙を流されり是皇子孫の此夷の為に苦め
られんことを慮りてなり
此夷を戰を好み自ら海魁と稱し年毎に春風吹きて海
面の氷の解くを待ち蛇の形に似る船に打乘りて
スカンヂナヒアの山國を棄て南又は西南の海中を轉
航しクリ今椰威及びノルマンヂといふ所に舊此夷の
住し處あれば斯く名つけしなり
查理曼の時ノルスメン人のエルベ河に入らんことを
恐れ河の口に堅固なる城を築きクリ今のハンビュルグ

城是なり前にて自國に内亂多かりしを以て諸國に
冦をるの暇なかりクリ或書に云く紀元七百四十年に
於て連馬王ハロルドノルスメンの一族ブラーバルラといふ處
にて瑞典王シギュルドノルスメンの一族と大に戰ひハロルド
を兵敗れて身死しクリ以てシギュルド遂にスカンヂ
ナヒアの君なり
夫れよりノルスメン人の北海を亂妨して諸國を腦ま
せるに至るシギュルドの子レグナル、ロットブロックリンヂス
ハルンを亂妨しクリときサクソン人イルラの為に雪
にせられ蛇責に逢ひしがレグナルの更に臆する氣色
もなく軍の歌を歌ひクリ死しクリとぞ

ノルスメン人の兇猛なることを言語を以て述べ難く其敵を突入るとき人の勢ひ恰も虎の怒るが如し加之ふるゝ其信せる宗旨も其好める歌も皆軍を勸めるを是を何故ぞとあれば其信仰しゝるオヂン神はもと北國の勇士なりしと言ひ習はし天堂第一の樂を敵の頭を盃に代へて美酒を飲むことなりとし且つ戰場に討死したる者は非されば天堂に趣くこと能はざるなり酒宴の席にて歌ふも亦勇氣を勵ましたる歌なりとぞ然るに耶蘇教の僧ユンスガルといふ者僅數人の僧を從へてスカンヂナヒアの國に入りメーラルンの岸なる「ビオルン」館に於て耶蘇教を說しが教門に歸する者

日に多く後には遂にもとの宗旨を押し倒すに至るに

偖もノルスメン人は諸國を惱ましゝが就中英佛の兩國を其地北海に鄰るを以てノルスメン人の為に惱まされること最多かりしハロルドの挪威に王なりし頃自紀元八百六十年至九百三十一年英國の王はアルフレットといへる英傑の君なりしかばノルスメン人は英國に冠を奪ふと能はざりしが其子孫の代に至りて英國の政又衰へたりしかばノルスメン人遂に此國を攻め取りカニュートといふる酋長を立て英主とせしより二十四年の後ノルスメン族の王嗣絶へ再び本國の人位に

登りゝるが程あくノルマンヂ公維廉の為に攻め滅ぼされゝり

ノルマンヂの人々下に説く如くノルスメン人の居留せるゝのゝり然し維廉の項に至りていもゝゝ佛の風俗に染ゝあれしゝば之ゝふ兇暴ある海賊にい非ずして却て鎧を着ゝ騎馬武者にてぞゝりゝゝ

維廉の英國を攻め

取ゝと委しくい西洋易知録外篇にゝり

紀元九百零一年ノルスメン人能を恵きゝゝる小船數十艘を以て佛國に来り塞納河の上流に泝りて攻め寄せゝり此時の船大将いロルロとゝへゝる者ありしにてもノルスメン人いロールヨン城を拔き之を巣穴とゝして

數年近郡を侵掠しゝり去る程にノルスメン人い人數日々に増加し之に加ゝゝる佛の農民等ローヨン城に集り来ゝて降を乞ひし程にノルスメン人の勢益盛大とゝり巴勒の都も二度まで囲まれゝり佛王查理ゼンプル大に之を恐きエプト河の邊ゝるシントクレール城に於てロルロと對面し之をノルマンヂ及びブレターンの地に封しノルマンヂ公と號せしめ佛國諸侯の列に加ゝしむロルロ之を諾しゝり時に紀元九百十一年ゝり之ゝり前にノルスメンの一酋長ハスチングスとゝへゝる者佛國に居住しシャルトルス侯に封せゝり

ノルスメン人の佛國(フランス)に来て佛國を益ふしとすべし今佛國の船將船客の名高き者ハ往くノルマンヂの地に起る者多しロルロに從ひ来りし者佛人の女と緣組をふしくるより北國の鄙語を棄てゝ佛語とつゝひ遂に唯船の語のみぞ北國の言葉を殘し用ゐる至り今に至り佛の船將ノルスの船言葉を以て水夫に喻し聽ゝをこゝろといふ其ものもノルスメン人ハ又其好める航海の業をも打棄て農民となりしが尚勇を好める舊俗を棄つることなく皆悅で義俠の風を學び詩人も亦勇しき詩のみを作り國民の勇氣を勵ましけりされば後十字戰の起るに至りてノルマンヂ人最勇功を顯いせり

ノルスメン人ハ唯海上より勢を張りしのみに非ず歐羅巴の東北にも侵入し二城を築きくり一ハイルメン湖邊にありてキーフといひ一ハドニープル河邊にありてゴロッドといひ一ハドニーブル河邊にありてキーフといふ者ノフゴロッドの王となり紀元八百六十二年酋長ルリックゼゼストと共に魯西亞國の始原となりルリックの時宰相オレグキーフを取りて國を廣めルリックの子死し其妻オルガの時希臘教國に傳いりオルガの孫フラミル第一の時に至り王自ら此宗旨を奉じて紀元九百八十年之を國教と定めり紀元九百八十年より七百三十六箇年の間その子孫魯西

亞國と支配しヘオドルと云へる人に至りて其族滅ぶ
紀元八百六十二年より千五百九十八年に至る
紀元千零十六年耶路撒冷より歸りくる數個のノルマンヂ人伊太利南地にあるサレルの侯を助くて亞剌伯人の賊船を逐ひ拂ひくるノルマンヂの國主たるを聞き我も我もと爭て伊太利に集ひ來りぬ此時に當りて東帝國の政府にて悉西利より亞剌伯人を追拂て島を取返さんと欲しくる折ありしかばノルマンヂ人等此國に雇られ多くしが賞の少きを以て一同に怒りを起し東帝に背きてアヒュアカラブリアを攻め取りくる時に紀元千零四十年ありこの兵の隊長はノルマンヂの小

ーテウル人の二子にして兄の名はロベルトギスカルドと云ひ弟の名をロヂルと云へりギスカルドをアピュアと取てくるアピュア王と稱し二度希臘を侵しくる初めの時は紀元千零八十一年にて此時のヂュラグー合戰は古今大戰の一なりき弟ロヂルも亞剌伯人と悉西利より追拂ひて鳴を打平らげ其子に至りて遂に此島の王と稱しくる

第六篇　查理曼帝宮中の風儀を述ぶ

查理曼は平生麻布の襦袢を着股引を穿ち其上に鎖總の付きたる長き服を着し脚に木綿を卷き足に革の沓

と履きそり冬い毛皮の短衣と着又其上ゑ青き長外套（からくとう）
と掛け金の帯を以て金柄の剣を帯びあり査理曼（シャルレマン）を常
ゑ此の如く単薄ある装を為せしと雖も外國の使
節を見るときい立派ある衣裳を着し金玉を帯びしと
ぞ査理曼を佛郎哥（フランコ）風の服を好むこと甚しうそれば
一生のうち羅馬（ローマ）風の服を着せしい僅ゑ二度ゑ過ぎう
しと云ふ

一日査理曼近臣を従へて獵ゑ出でられしが一天忽ち
黒雲を生し大雨甚しく降りしかば美服を装ひある近
臣等い大ゑ之を苦しみありしが査理曼を常ゑ美服を好
まぎりそれば此日も羊皮の麁服を着せられしを以て

更ゑ之ゑ苦むことふく近臣の狼狽惑ふを見て笑され
ありきて査理曼を宮中ゑ帰りし處殊更近臣の退出を
許さん其服の盡く濕りひ損ずると待まりり翌日査理
曼近臣を召し昨日の服を着して出仕せへしと命せり
きしかば近臣皆迷惑ゑ及び只管奢侈の愚ゑ悔しりとぞ

査理曼い食せるとき四肴より多く食ふことふし最も
新鮮ある獣肉を焙りあると好まれり食事のとき待
臣として史書又い真神記（オリギュスチン）の著せる教書（キョウショ）ありと讀ましめ
りり夏日ゑい晝食後ゑ數箇の果實を食し唯一杯の蒲
萄酒を飲ミ二三時の間午睡をあせり尤酒ゑ醉ふこと

と甚だ惡まれ夜分は眠ることを少ふし或時は一夜は四五度も起きしことなりしとぞ毎朝衣裳を着る間も惜みて此間は臣下の朝見をぞ受られる

査理曼（シャルレマン）は臘丁（ラテン）語は長し少しは希臘（ギリシヤ）語も知り且つ甚だ天文學を好みる故は諸國の學者宮中に集まり帝は國王の尊きを棄て親友の如く此人々と交りて共に書を讀み互に討論を為しる然るに此人々の長せることいれば帝則ち之に從て其所長とを学びる故にピサのペートルを文法を帝に教えアルコイン（附記）は見を論理天文を教えり査理曼の晩年はゆきひ佛郎哥（フランコ）の文字廢まりて羅馬（ロマ）の文字一般に行はるに至

りしかば帝則ち羅馬字の手本を枕の下に入れ置き夜中目の覺めるる毎に其文字を學びるとぞ豈感歎に堪えぎるんや

査理曼（シャルレマン）の公主は行狀惡しきを以て帝常に之を憂へられ帝宮中に在るときは公主も侍女の事を務めしめけり尤帝の旅するとき公主も王子も皆之を引連きて出られる

アキスグラニュム城（今のエリスパル）は査理曼の領國の北都なり此城はもと羅馬（ロマ）人の建てし所なり査理曼は此地の形色を愛し數此に趣られる

査理曼此地に天下の人を驚ろかしき一大宮殿を建て

んと欲しくゝり時ゝ羅馬教公いラベナ城より「ポルヒリ」石の圓柱并ゝ切嵌細工の敷石を徙して之を帝ゝ贈りゝり帝い諸國の職人を集めゝ此宮を造らしめしゝが速ゝ成就しゝりゝり青銅を以て門とふし大理石を以て壁とふゝ壁の内ゝい廳堂長廊許多ゝして書庫学校戲場浴室ゝ至るまて一とゝして備つゝゝふゝ

學校いアルコインゝ委任して之と支配せしめゝり書庫ゝい許多の書を集めしを以て今ゝ至るまで之の為ゝ昔しの珍書の傳いまるゝの多し査理曼い國中ゝ学藝の盛んゝんことを欲し只管之を勸めゝれい諸州各学校を建つゝふ至まり

査理曼い難事ゝ當りて賢人勇者ゝ議せりといへゝも常ゝい議事官を置ゝゝゝり然し「コーントオフパレイスゝて訟獄の疑しきを決する官を置ゝれゝり佛郎哥人い一年ゝ二度會合して法律を取極め明年の租税を定めゝり二度の會のうち前の會い後の會より肝要ゝり後の會ゝい唯租税の未ゞ收まゝまるを收めしゝりと專一と為しゝゝゝり

西洋易知録巻之三附記

第三世聞人の姓氏

アルコイン　約育(ヨルク)の人○ベードの門人あり○査理曼(シャルレマン)の宮中に居りて帝を教えあり○其著を所詩集教書等なり○紀元八百零四年に死せり

ポールワルドフリット　紀元七百四十年頃に生れ七百九十九年に死せり○伊太利(イタリヤ)の人なり○初め倫巴爾(ロンバルト)王デレデリュースに仕へ後査理曼(シャルレマン)の宮中に趣き希臘(ギリヤ)語を教えあり○詩學史學に長じ○著を所倫巴爾(ロンバル)閣史なり

イヂンアルド　西佛郎哥人(フランシス)あり○査理曼(シャルレマン)に仕へて書記官となる○査理曼の傳其他史書を著せり○紀元四百四十一年頃に死せり

ジョンスコチュスイリゼナ　愛蘭(アイルランド)の人○常に教法心理の両科を好む○第九紀の中頃に佛郎西(フランス)に在り○紀元八百七十五年に死せり

アルフレット　英國(イギリス)の王なり○教典及びベードの史記エーソップの野史とサクソン語に飜譯せり○書生を愛せり○紀元九百零一年に歿せり

アウィセンナ又名アベシナ　紀元九百八十年ボクアラの近邊に生る○醫術理学に長ず○其著せる「カノン」と

いへる書は數百年の間世に行はれ名高きものあり○其他書を著すこと殆一百部あり其中にて名高きは「レメディー」といへる理学書なり

ギドダレゾ　第十紀の末にトスカンニのアレゾに生る○「ベネチクアンゴ」の寺の僧なり○音樂の事に委しく「シクロロギュス」といへる音樂を教る書を著せり○第十一紀の中頃に死せり

第三世の紀事の表

紀事	紀元
查理曼佛郎哥の王とふる	七百七十一年
查理曼の兵ロンセバルレスヨ於て敗北を	七百七十八年
ハローンアルラスシッド回教の徒の王とある	七百八十六年
僧徒ニスヨ會を(七)	七百八十七年
睫人始て英國ヨ上陸を	仝
イレーン名東帝とある	七百八十八年
查理曼羅馬城ヨ於て西帝の位ヨ即く	八百年
查理曼祖を	八百十四年
イグベルト英國を一統を	八百二十七年
ホレテ子ールの戰爭	八百四十一年
查理曼の三孫ベルヂュンヨ盟ふ	八百四十三年
ルユリック魯西亞國を建つ	八百六十二年
アルブレット英國ヨ王あり	八百七十一年
アルブレット祖を	九百零一年
ノルスメンの長ロルロノルマンヂ公とある	九百十一年

日耳曼帝オト位ヲ即ク	九百三十六年
亞剌伯「イミルアルオムラ」ノ職ヲ置ク	九百四十年
オト西帝ノ位ヲ即ク	九百六十二年
東帝ジヨンジミスセス位ヲ即ク	九百六十九年
オト殂ス	九百七十三年
ジヨンジミスセス殂ス	九百七十五年
佛人ヒューカペット王位ヲ篡ヲ提リ「カペチアン」朝起ル	九百八十七年
嗹王カニュート英王トアル	千零十七年
ノルマンヂノ人伊太利南地ヲ侵掠ス	千零四十年

イドワルドゼヨンヘッシヨン英王トアル	千零四十一年
土耳其人バグダットヲ取ル	千零五十五年
伊太利國ヲ「ゲルフ」教公「ギベリン」帝ノ方ノ二黨起ル	千零六十一年
土耳其人邪路撒冷ヲ取ル	千零六十五年
ノルマンヂ公維廉英國ヲ取ル	千零六十六年
ジュラヅノ戰爭	千零八十一年

西洋易知錄卷之三附記終

知新舍藏板

明治庚午年新鐫

河津孫四郎譯述

西洋見聞録

官准　知新館藏板

知新館藏梓

二帙